

福祉教育への挑戦(3)

生徒との授業中のやりとりから

高井裕二

1回目の投稿時に、高等専修学校には多様な生徒がいることが魅力の一つであると書きました。まだまだ一人前に授業ができているわけではありませんが、今回は勤務1年目の時に感じた生徒とのやり取りの魅力について書いてみたいと思います。1年目は非常勤としてではなく、常勤講師として勤務していたので、昼休憩や放課後などに生徒と関わる機会が多くありました。

教員の自己開示(ネガティブ経験)を共感的に聞いてくれる

高等専修学校には、小中学校時代に不登校を経験している生徒も一定数います。中には辛いじめや教師による理不尽な指導を体験している生徒もいます。そのような生徒は、生徒同士の人間関係もごちなく、教員に対しても大きな不信感を抱いています。授業中もほとんど話を聞いてくれず、たまに質問をしてきたかと思えば、「先生って結婚してるん？」のような授業とは関係ない内容ばかり。他者との関係性作りにはある程度自信があったので、社会福祉士として落ち込みました。

数カ月たった後に、ある生徒が授業中に質問をくれました。「先生は、怒ることあるん？」と。私は授業中、スピーチロックに繋がりがねない口調の強い禁止言葉を使わないように心がけています。「やかましい！」ではなく、「よーし、前を向こか」と落ち着いた口調で伝えているので、何をしても怒らないのではないかと思ったようです。これは何かの糸口になると思い、素直な気持ちを伝えてみました。

「そりゃ怒る時だってあるよ。でも自分自身に対して怒ることが多いかな。小学校の時、全然勉強ができなくて、担任の先生が『この問題、高井君でも解けたぞ』と言われた時に、この先生は自分のことをよく思っていないなと感じて。なんで自分は人と同じことができないんだろうと悔しかった。だから、授業についていけないとか、相手が話している内容が十分に理解できないっていうのは自分も経験があるし、人を責めるようなコミュニケーションは取りたくないねん」と過去の経

験も踏まえて伝えたところ、生徒たちの表情が今までと全く違って見えました。こういう話を茶化さずに、共感的に聞いてくれるんだなと嬉しく思いました。それ以後、彼らが授業での問いかけにも積極的に返答してくれるようになるとともに、授業終わりや放課後に生徒から個別で学校や家庭の相談を受けることが多くなりました。彼らの中で私の印象が変わったのだと感じます。職員室前で出待ちのように並んでくれていた光景は、忘れられません。

障害、障がい、しょうがい、「障害」を考える問いから

「先生は『しょうがい』は漢字で書く派なん？A先生は『がい』を平仮名で書くようにしてるって言ってたで」という質問を授業中に受けました。こういう質問が自然と出るのは非常に嬉しいものです。みなさんなら、どう答えるでしょうか。

私は障害者の友人から「障害は自分の中にあるやない。君らと私の間(社会)にあるもんや。『障がい』とか書いて君たちが誤魔化さないでほしい。」と言われてから、漢字以外で書いたことはありません。このように、環境に目を向けないで個人の中に障害があると考えて、個人に対する上からの配慮のように認識されかねないこと、2000年代後半に政党マニフェストなどで記載されてきたように、当事者が運動によって獲得してきた表記ではないこと、「がい」がダメで「障」は良いのか説明しづらいことなど、自分が漢字を用いる理由を生徒に伝えました。合わせて、絶対的な答えはなく、その言葉に何を込めるかが大事だと言いました。

すると、ある生徒が「先生」と優しい声で話しかけてきました。障害者手帳を持っている当事者の生徒で、以下のような素敵なコメントをくれました。

「仰ろうとしていることはわかります。でも、これ本当に当事者からするとどうでも良い議論なんですよ。健常者が勝手に盛り上がってるだけで。そもそも健常者と障害者という二分した考えがどうなのかと思ってます。」

私が即興では十分な応答ができなかったものの、この生徒のコメントによってこの問いをより深掘りすることができました。多様な生徒がいることで、私ではできない語りが生まれる。非常に面白いです。これ以来、生徒の意見を聞き、一緒に考えるのが楽しみでなりません。

次回も自己語りが増えますが、ここまで連載における福祉教育を定義していませんし、自分と福祉教育との出会いについて書いてみたいと思います。